

アイデンティティの複数性

人間社会学域法学類 4年

氏名 松本恭平

名列番号 519

学籍番号 0951020144

指導教員 足立英彦

提出年月日 2015年1月15日

論文要旨

現代の政治・社会問題の多くは、異なる集団にかかわる多様なアイデンティティの主張の衝突をめぐって起きている。なぜならアイデンティティの概念はわれわれの思考や行動にさまざまな影響を及ぼすからだ。人々のなかでアイデンティティの主張が拡大すると、時に、集団レベルでの対立・紛争を誘発する。また、二つのイデオロギーによって世界が二分されていた冷戦の時代が終焉を迎えた現在では、世界は多元的な社会となった。その結果、民族や宗教の間での争いが現在いっそう増えてきているのである。人類はその争いに対して様々な対応をとってきたのだが、解決の兆しはあまり見られない。しかし、そのような状況の中で、アマルティア・センは一つの解決策を見出した。それが、「アイデンティティの複数性」である。

本論文は、アマルティア・センの著書『アイデンティティと暴力』を参考にして、彼の主張する「アイデンティティの複数性」について紹介する。アマルティア・センは、コミュニタリアンのマイケル・サンデルを批判することで、アマルティア・セン自身のアイデンティティの捉え方を肯定する。そこで私は、その批判に対して私なりにマイケル・サンデルの側から反論を試みることで、アマルティア・センが想定していない「アイデンティティの複数性」についてのデメリットを主張しようと考えている。その上で、私自身がアマルティア・センの思想に賛成できるかどうかを言及することが本論文の目的である。そのために、まず、アマルティア・センが考えるアイデンティティを紹介し（第一章）、次にマイケル・サンデルのコミュニタリアニズムについて説明をする（第二章）。その上で、アマルティア・センがマイケル・サンデルのどこを批判したのかを整理した上で、アマルティア・センに対する反論を試みたいと考えている（第三章）。そして、反論をした結果、自身がアマルティア・センの考えに賛成できることを結びで言及し終わろうと思う。

目次

はじめに

第一章 センのアイデンティティ

第一節 アイデンティティの特徴

第二節 還元主義への批判

- (1) 「アイデンティティの軽視」
- (2) 「単一的な認識」

第二章 マイケル・サンデルのコミュニタリアニズム

第一節 リベラリズム

- (1) 功利主義に対する批判
- (2) リバタリアニズムに対する批判
- (3) ジョン・ロールズのリベラリズム

第二節 コミュニタリアニズム

第三章 批判に対しての反論

第一節 センからサンデルに対する批判

- (1) センの認識するコミュニタリアニズム
- (2) サンデルに対するセンの批判の内容
- (3) 反論

おわりに

はじめに

イデオロギーの対立を背景とした冷戦時代の崩壊とともに、人々は戦争のない平和な世界が訪れることを期待した。しかし、次に待っていたのは、宗教や民族といった新たな背景による暴力であった。

センは、アイデンティティという面から、この問題に立ち向かおうとする。そのため、彼のアイデンティティの捉え方がどういったものなのかを説明する。

第一章 センのアイデンティティ

本章では、論文全体の導入部分として、センが考えるアイデンティティの捉え方について説明を行う。そのために、まず、センの考えるアイデンティティの特徴について整理を行う（第一節）。そして、この特徴が軽視されてきた、もしくは誤解されてきた原因だとセンが主張する還元主義について説明を行い、センの批判を紹介する（第二節）。

第一節 アイデンティティの特徴

センによれば、人々は様々な集団に属しており、所属するすべての集合体がそれぞれ、人々に特定のアイデンティティを付与しているのである。例えば、金沢に住んでいるということ、学生であるということ、バスケットボールをプレイすることが好きで、といったふうに、国籍、居住地、性別、政治信条、職業、好きな食べ物、嫌いなスポーツ、思い出のある音楽などがその集合体に当てはまる。そのすべてが同時に自分自身のアイデンティティであり、つまりは自分自身を表現できるものすべてが、アイデンティティとなる。以上のことから、われわれは確実に複数のアイデンティティを有している。これらのアイデンティティはそれぞれが重要なのであり、一つのアイデンティティの重要性が他のアイデンティティの重要性を失わせるものではないのだが、それとともに、実生活では、われわれは異なった帰属や関係のなかで、暗黙のうちにはあっても、どのアイデンティティを優先すべきかを常に選択しなければならない。例えば、ベジタリアンで、考古学者のアイデンティティを有する人間は、レストランで食事をするときは、ベジタリアンのアイデンティティが優先され、考古学に関する講演に出席するときは、考古学のアイデンティティが優先される。

また、アイデンティティを意識することで生まれる二つの特性がある。それは、「包括性」と「排他性」²である。われわれは、特定のアイデンティティに関心を向けることで連帯感を高め、お互いに助け合い、自己中心的な営みを越えた活動をする。2011年に日本で起きた東日本大震災の後、日本では、震災の被害を受けた人々を救うべく、数多くの義援金が集まり、全国から集まった人々がボランティア活動を行ったことは記憶に新しいであろう。

¹ アマルティア・センはインドの経済学者であり、哲学、政治、倫理学、社会学にも影響を与えている。

² 後掲①18頁

これが、「包括性」である。しかし、この「包括性」が行き過ぎてしまうと、つまり、一つのコミュニティへの帰属意識が強くなりすぎると、別のコミュニティに住む人間を排除しようとする。これが「排他性」である。1994年にルワンダでは、ツチ族とフツ族の二つの民族間の憎しみが原因で大虐殺が起きた。これは、それぞれの民族への帰属意識が強すぎてしまった結果起きてしまった事例である。

以上のように、アイデンティティは複数存在し、「包括性」と「排他性」があることを説明した。また、「包括性」と「排他性」を説明する中で、アイデンティティは人々の思考や行動に様々な影響を与えていることを説明した。アイデンティティというものはわれわれの存在や行為を知る上でとても重要なものなのである。しかし、センによれば、今までアイデンティティは軽視、もしくは誤解されてきた。その原因として二種類の還元主義³をセンは批判する。次節では、この二種類の還元主義について説明し、批判する。

第二節 還元主義への批判

センの捉えるアイデンティティの特徴に対して、人々は、アイデンティティ自体を軽視するか、アイデンティティの特徴を一面的に捉えることで還元した。これが、還元主義⁴である。本節では、「アイデンティティの軽視」、「単一的な認識」といった二種類の還元主義を説明し、批判する。

(1) 「アイデンティティの軽視」⁵

「アイデンティティの軽視」とは、他者とのアイデンティティの共有意識を軽んじるか、無視することである。これに代表されるものが、現代の経済学理論である。現代の経済学理論では、人はきわめて利己的である、という仮定が、自然の理であると見なされる傾向がある。しかし、この見方のみが正しいのであれば、自身の利益にならないことを行ったマザー・テレサやマーティン・ルーサー・キングなどの偉人たちや社会のなかで多くの帰属関係と責務をもちながら生きている人達を動かした、もしくは、動かす動機を無視している。彼らを動かした、もしくは、動かす動機は、他者とのアイデンティティの共有意識なのである。例えば、マザー・テレサは同じ人類であるという共有意識をもって、恵まれない人々を救い、同じくマーティン・ルーサー・キングは黒人の人権を求める運動を行った。

以上のことから、センは「アイデンティティ軽視」という考え方を批判する。ただし、人は利己的な行動を常にとるとは限らないことを上記で示しただけであって、人の行動は常に他者とのアイデンティティの共有意識によって影響されることを示したわけではない。

³ 後掲①40頁

⁴ 還元主義とは、世界の複雑で多様な事象を単一のレベルの基本的な要素に還元して説明しようという立場のことを言う

⁵ 後掲①42頁

債権者と債務者の関係において、好ましいと思えない相手や共感を抱かない相手に対して果たさなければならない権利や義務により行動することは、実生活において多々あるからである。しかし、他者とのアイデンティティを共有することは、自分のためだけでなく、他者のために行動する動機をわれわれに与えてくれるものであり、したがって、自己利益のみに基づく行動に対して対抗できるとも重要なことなのである。

(2)「単一的な認識」⁶

「単一的な認識」とは、物事を一つの側面からしか考えないことである。例えば、異なった宗教 A と B を信じる二人の人間はどのような人間なのかと問われたとき、「単一的な認識」をすると、彼らを宗教 A を信じる人と宗教 B を信じる人というふうに簡単に分類して答えるのである。このような認識をする原因は、われわれ自身にある場合もあれば、他者によって引き起こされる場合もある。例えば、党派主義の活動家のように人々を扇動するような人間やその活動家の主張を安易に受け入れる人間は「単一的な認識」をする人間である。しかし、第一節で示したように、われわれはアイデンティティを確実に複数有している。限定的なアイデンティティから生じる帰属と忠誠心のほかをすべて無視することは、人や物事を理解するうえで非常に簡単なことではあるのだが、最終的には人々を惑わし、社会的緊張や暴力に結びついてしまうのである。

以上で第一章の説明を終える。第一章では、センの考えるアイデンティティの特徴を説明し、その特徴が軽視、誤解されてきた原因である還元主義を説明した。第二章では、第一章で取り上げたアイデンティティについて「単一的な認識」をする具体例として、マイケル・サンデルが考えるアイデンティティの特徴を説明する。

第二章 マイケル・サンデルのコミュニタリアニズム

本章では、まずサンデルが特に批判した、ジョン・ロールズのリベラリズムの特徴について紹介する（第一節）。そして、そのリベラリズムに対してサンデルによる批判を行うことで、サンデルのコミュニタリアニズムについて紹介する。

第一節 リベラリズム

本節では、リベラリズムが批判対象とする功利主義とリバタリアニズムをロールズの立場から批判しながら(1)(2)、最後にロールズにおけるリベラリズムの特徴を整理していく(3)

(1)功利主義に対する批判

高度経済成長期の日本のように産業の発達した国々で支配的な正義の構想となっていたのは功利主義であった⁷。法律と公共政策は、最大多数の最大幸福を追求しなければならない

⁶ 後掲①45頁

⁷ 後掲⑨104頁

かったのである。ロールズは、功利主義に対して人間一人ひとりの区別を重要視していない点を批判する。全体の幸福の最大化を求めることによって、功利主義は社会全体を一人の人間であるかのように扱い、人間の多様な欲求を一つの欲求に体系化し、その最大化を図ろうとする。しかし、そのせいで、人間それぞれの多様性や個性を尊重することができなくなるのである。もちろん、功利主義に基づいても個人の権利を尊重することを正当化できる場合はある。しかし、それは長い目で見て、将来的に社会全体の「功利⁸」となる場合にのみ、個人の権利を尊重すべきである、という考えである。しかし、そのような場合を想定することはできても、実際はそのような「功利」の計算は性格にできるはずもないので、個人の権利を尊重することも不安定になる。

また、個人の権利を尊重する根拠として、ロールズは仮説的な「原初状態⁹」を想定する。この原初状態では、人々は「無知のヴェール¹⁰」という目隠しに覆われており、自分の年齢、性、地位、財産、能力などが一切わからないのである。彼らは、自分の地位だけにとらわれず、自己の状況の改善だけを合理的に求めるように設定されている。そのような状況の下では、人は自分が最も不利な状態であることを不安に感じ、必ず不利な状態の人々でも救いのある政策に合意するのである。したがって、「原初状態」にある人々は、自身の生存可能性が、将来自分以外の大多数の意見によって犠牲にあうことを避けるため、全ての人間にある程度の基本的自由を与えることを認めるのである。

(2) リバタリアニズムに対する批判

リバタリアニズムは、個人の自由の尊重という点ではロールズのリベラリズムと同じだが、ロールズ的リベラリズムとは異なる。リバタリアニズムは政治的自由だけでなく、経済的自由も重視し、権利のなかには非常に強い「所有権」が含まれており、市場経済を重視する思想である。したがって、市場経済による分配であればすべて正しく、市場の恩恵を受けられない人々への再分配をすべて不正とする。これを支える基盤が「所有権¹¹」という考え方である。人間は肉体を所有しており、つまり自己を所有していることになる。その結果、自分の肉体を使って生み出した労働の成果による財産は自己のものとなる。だからこそ、人々が所有する財産は、それが詐欺や窃盗などで他人を侵害した結果得られたものでない限り、所有する権利がある、という考え方が特にリバタリアンであるロバート・ノージックの「所有権」である。ロールズはこの考え方を批判する。人々が自身で所有すると考えられている才能や財産や努力というものは、非常に恣意的な産物であり、偶然性を帯びた産物なのである。

⁸ 後掲②121頁、功利もしくは最大幸福原理

⁹ 後掲③13頁

¹⁰ 後掲③14頁

¹¹ 後掲④255頁

才能や財産は、われわれがもつ属性を表現しているが、われわれがわれわれであること、つまりは人間の本質を表現しているわけではない。それらはわれわれにとって、たまたまなのである。したがって、人それぞれがもつ才能や財産による成果が彼らに帰属することを認めるべきではなく、共有の財産として、例えば課税といった方法で再分配すべきなのである。これをロールズは「格差原理¹²⁾」と呼ぶ。

(3) ジョン・ロールズのリベラリズム

以上のことから、ロールズは、われわれは基本的自由を有し、個人の権利が尊重されなければならないこと(1)、われわれが所有する才能や財産を共有の財産として、社会的に最も恵まれない人々に再分配をする「格差原理」(2)を説明した。

また、「原初状態」についてさらに整理することで、ロールズのリベラリズムを説明していく。(1)で述べたように、「原初状態」とは、人々に「無知のヴェール」で目隠しすることで、自分の年齢、性、地位、財産、能力などを見えなくすることを想定することであり、その状態では、自分自身が最も不利な状況であることを不安視するため、社会的に不利な地位にある人間を救うことのできる政策を選ぶ。そして、そのような状況で選ぶ原理こそ、ロールズの正義の原理となる。そして、この原理が前提とする人間像は、正義を最も重要な判断基準とする、「負荷なき自己¹³⁾」であり、目的や目標や属性に優先し、それから独立している。実際の自分自身の社会状況に優先して、「原初状態」の自分がいて、そういった意味で、自由で独立し、選択能力をもつ行為者こそ「負荷なき自己」と定義できる。したがって、ここでは自身の経験は価値のあるものではなく、つまり何が善いのか、何が悪いのかといった経験的な判断は、正義に優先しない。これをジョン・ロールズは「正は善に優先する」と述べている。

以上のことから、ロールズにおけるリベラリズムにとって、とりわけ重要な特徴が説明できる。基本的自由の尊重、格差原理、負荷なき自己、そして正の優先である。

第二節 コミュニタリアニズム

コミュニタリアニズムとは、ロールズを主流としたリベラリズムを批判することで現れた思想である。そのため、本章の第一節でとりあげたリベラリズムについて批判することで、コミュニタリアニズムを説明する(1)。

(1) 格差原理は正当なのか

格差原理とは、本章第一節(2)で述べたように、われわれが生まれつきもっている才能や財産などは偶然の産物であるから、それらから生み出される成果は彼らだけに帰属するのではなく、他者との共有財産として社会が帰属する優先権をもつ、という原理である。

¹²⁾ 後掲③47頁

¹³⁾ 後掲③93頁

しかし、本人ではなく、社会が帰属先として優先権をもつ正当な理由はどこにあるのであろうか。生まれつき持っている才能や財産は、偶然性によるものだから、本人にはふさわしくないからといって、社会がそれにふさわしいと言える根拠はどこにもない。

サンデルは格差原理についてつぎのような見解を述べている。

格差原理は功利主義と同様分かち合いの原理だと言える。そうした原理の前提として、この原理によってみずからの資産が分配される人びとや、みずからの尽力が集団の努力に組み入れられる人びとのあいだには、あらかじめ何らかの道徳的絆がなければならぬはずだ。さもなければ、格差原理はある人びとをほかの人びとの目的達成の手段として利用するための方法、つまり、こうしたリベラリズムが躍起になって拒否する方法にすぎなくなる。¹⁴

われわれは、前もって固体化され、自らの目的に優先して与えられた、全く負荷なき所有の主体ではありえず、自らの中心的な大望や愛着によって一部が構成され、自己理解が修正されるに従って、発展し、変容して、いくことに開かれ、実際に影響を受ける主体でなければならない。しかも、そうなるためには、自らの構成的な自己理解には、単独の個人よりも広い主体が、つまり、構成的な意味でのコミュニティが定義される程度において、家族・部族・都市・階級・国家・国民であれ、そのようなものが含まれている。¹⁵

つまり、「格差原理』を含む正義の原理に同意することができるのは、「無知のヴェール」で目隠しした「負荷なき自己」ではなく、自分の所属するコミュニティに愛着を感じられる存在ではないかと提案する。このような存在は一般に「負荷のかかった自己¹⁶」と呼ばれる。

ここで、整理しておきたいことは、ロールズは、功利主義を個人の多様性を無視しているという理由で批判していたということである。つまり、彼は、人間はそれぞれ多様な生き物であると認めているのである。しかしながら、リベラリズムを肯定するために、つまり個人の自由を尊重させるために、ロールズは「原初状態」を想定し、自己と自己の多様性を引き離し、現実世界では存在しない「負荷なき自己」を作り上げる。政策を立案するうえで、対象となる相手は、現実世界に存在する多様な自己なのであり、それとは真反対の仮想世界に存在する「負荷なき自己」を対象とすることはそもそも不思議な話である。また、独自の文化が存在する、なんらかのコミュニティに人間は生まれ育つことで、人間はなんらかの個性を有するわけであり、「負荷なき自己」なるものは存在するものではない。

¹⁴ 後掲⑤249頁

¹⁵ 後掲⑥197頁

¹⁶ 後掲⑦86頁

サンデルは、ロールズの不整合な人間観を批判する¹⁷ことで、「負荷なき自己」という存在を否定し、「負荷のかかった自己」を想定して、社会を作り上げることを提案する。それとともに、人間は家族やコミュニティや国家に対し、様々な道徳的責務などを負うことになる。

したがって、「負荷なき自己」を前提に置いた「格差原理」は正当とは言えないことになる。

第三章 批判に対しての反論

本章では、センがサンデルを批判した内容について正当性があるのか、私なりにサンデルの側から批判に対して反論することで確かめていくことにする。

第一節 センのサンデルに対する批判

(1) センの認識するコミュニタリアニズム

センによれば、コミュニタリアンは、人間は「負荷のある自己」だからこそ、特定の集団にのみ属しており、その集団に属していることのみが自分自身のアイデンティティを表現するものだと見なしている。コミュニタリアンにとって、アイデンティティとは、もともと運命づけられたものであり、ただ「発見¹⁸」するかどうかによって認識されるのである。そして、かれらの所有するアイデンティティは他の何よりも最も重要なものとして認識される。

以下では、サンデルの主張を引用する。

コミュニティが示すものは、同胞の市民として、何を持つかだけでなく、何であるかもであり、選択する関係ではなく（自発的結合体でのように）、発見する愛着であり、単なる属性ではなく、自らのアイデンティティの構成要素である。¹⁹

上の引用からわかるように、センは、コミュニタリアンの中でも、実際このように主張したサンデルを特に批判する。

(2) サンデルに対するセンの批判の内容

われわれは、人生を通して、複数の異なる集団に属していることを知っている。例えば、日本という国に生まれた日本人であり、スポーツクラブに所属しており、大学に所属する

¹⁷ 後掲⑤250頁

¹⁸ 後掲⑥172頁

¹⁹ 同上

大学生であるなど。つまり、「アイデンティティは、自分の居場所を発見することによってしか得られないとは限らない。それは取得し、獲得できるものでもある。²⁰⁾

(3) 反論

セン、サンデル、それぞれの学者が想定しているアイデンティティの意義の違いから、批判に対して反論を試みる。

人間のアイデンティティは選択の余地のない単一基準のものだと主張することは、人間を矮小化するだけでなく、世界を一触即発の状態にしやすくなる。突出した唯一の分類法による区分けにとって代わるものは、われわれはみな同じだという非現実的な主張などではない。われわれは同じではない。むしろ、問題の多い世界で調和を望めるとすれば、それは人間のアイデンティティの複数性によるものだろう。²¹⁾

アマルティア・センは一つのアイデンティティに固執することで、民族や宗教間での暴力が生まれていることを指摘し、その暴力に対抗できるものが、アイデンティティの複数性だと考えている。

しかし、サンデルからすれば、センのアイデンティティ観は国籍、居住地、性別、政治信条、職業、好きな食べ物、スポーツ、音楽など、単なる人間の属性を表現するに過ぎないと解釈できるのではないか。さらに、アイデンティティは自らが創りだすことのできるものだと考えており、流動的なものである。それに対して、サンデルは確固たる自分自身を見つけるためのものとしてアイデンティティと解釈できる。

そして、以下の文章においてアイデンティティの恐ろしさを指摘している。

前もって境界づけられていない自我が、そのアイデンティティに対して、あらゆる方向から浸水し、絶えず飲み込むおそれがありうる、企図や目的の波にさらわれてしまう事実である。そのさい、行為者は、自我の限界や境界を選別し、主体をその環境から識別することによって、そのアイデンティティを鍛えることにたえなければならない。²²⁾

サンデルは、コミュニティから与えられるアイデンティティによって自分自身をしっかりと理解することの重要性を説く。人間がアイデンティティを複数所有するからこそ生まれるデメリットも存在するのである。このような状態を一般的にアイデンティティ・クライシスと呼ぶが、「アイデンティティの複数性」は、暴力に対抗する恩恵ばかりでなく、自分

²⁰⁾ 後掲①61頁

²¹⁾ 後掲①35頁

²²⁾ 後掲⑥175頁

自身が誰なのかわからなくなるデメリットと隣り合わせであることを認識しなければならない。

結果として、私はセンに賛成しようと思う。アイデンティティを意識することは、時に暴力を助長する動機となりうる。しかし、サンデルが抱く固定的なアイデンティティ観は、好戦的なアイデンティティに対して、どう対処するのかについて、サンデルは述べていない。サンデルにとって、アイデンティティとはただ「発見」するものだからである。それに対して、センは、好戦的なアイデンティティに対しては、他の複数のアイデンティティの力で対抗できると主張する。その具体例として、私は、ルワンダで民族虐殺が起きた当時、逃げてきた人々を民族問わず、自分の経営するホテルにかくまった人物が、その経験をもとに書いた著書『ホテル・ルワンダの男』の一部分を紹介する。この本の著者は、ルワンダでの民族虐殺を経て、以下のことを述べている。

私はいい友人であろうと不愉快な人物であろうと関係なく、ホテルを訪れる客全員の気さくな話し相手になった。それが私の性分だった。私にはテーブルを挟んで一緒にコニャックを楽しめない相手はほとんどいない。よほどの状況でない限り、人は自分と世界を共有できる相手に憎しみを示すことはめったにない。だから私は人間の姿をした悪が酒を飲み立ち寄った時でも会話することができた。その弱点を発見し、穏和な部分を探し出した。殺人者たちが私の要請に応じて命を救うことに同意してくれたとき、彼らの中には虚栄心や自信のなさに加えて、人間的な礼儀正しさを見出すことができた。²³

もちろん、第三章で論じたように、「アイデンティティの複数性」のデメリットもわれわれは認識しなければならないのだが、上の引用で述べたとおり、自分と他者との間で共有できる世界が、つまり、共有できるアイデンティティがあることは、暴力に対抗しうる手段なのである。

²³ 後掲⑧286頁

おわりに

第一章において、アマルティア・センの「アイデンティティの複数性」について理解していただいたであろう。現在でもまだまだ解決の兆しの見えない国際紛争において、彼のアイデンティティへの捉え方は、当然納得のいくものであるが、しかしながらある意味斬新である。国際紛争について報じている新聞やニュースは、その原因や解決策を歴史的な見地からばかり判断しようとするきらいがある。しかし、その結果得られた成果などたかが知れているのではないか。パレスチナ問題などの宗教・民族間での紛争は、歴史をある程度理解したからといって、第三者が余計に介入するのは確実に間違っている。それらの紛争は非常にセンシティブなものだからである。しかし、今一度、第三者としてどう対応すればよいのか、アマルティア・センは『アイデンティティと暴力』という著書で応答してくれているような気がするのである。もちろん、本論考で論じたように、「アイデンティティの複数性」は、デメリットが存在する可能性があることも事実である。しかし、それにも勝り、われわれ人類がそれぞれのアイデンティティを共有し、相手に共感を抱くことは平和に近づく上で非常に大事だと私は思う。大事なことは、「アイデンティティの複数性」のデメリットを認識しつつ、平和に近づく手段として考えることである。

今後この論文を読んだ人が、アイデンティティについて深く考えてもらえる機会を持ってもらえるのであれば幸いである。

参考文献

- ① アマルティア・セン『アイデンティティと暴力 運命は幻想である』（勁草書房 2011年）
- ② ミル（水田洋訳）『世界の大思想』（河出書房 1967年）
- ③ ジョン・ロールズ（矢島鈞次訳）『正義論』（紀伊國屋書店 1994年）
- ④ ロバート・ノージック（嶋津格訳）『アナキー・国家・ユートピア』（木澤社 2002年）
- ⑤ マイケル・サンデル（鬼澤忍訳）『公共哲学』（ちくま学芸文庫 2011年）
- ⑥ M・J・サンデル（菊池理夫訳）『リベラリズムと正義の限界』（勁草書房 2009年）
- ⑦ 小林昌也『サンデルの政治哲学』（平凡社 2010年）
- ⑧ ポール・ルセサバキナ（堀川志野舞訳）『ホテル・ルワンダの男』（ヴィレッジブックス 2009年）
- ⑨ 深田三徳・濱真一郎編著『よくわかる法哲学・法思想』（ミネルヴァ書房 2011年）